様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２６ 年　 ５ 月 ２６ 日現在

機関番号：３２４１３
研究種目：基盤研究(C)
研究期間：2011～2013
課題番号：２３５３０８６１

研究課題名（和文）心理学とは何か？－心理学者の語りの分析－

研究課題名（英文）What is Psychology?: An Analysis of Psychologists' Talk.

研究代表者
村井　潤一郎（MURAI, Jun'ichiro）

文京学院大学・人間学部・教授

研究者番号：５０３３７６２２

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,900,000円、（間接経費）　　1,170,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では，多領域の心理学者への面接を行い，彼らの語りをもとに，心理学，心の特徴について検討した。対象者への質問は，「心とは何か」「心理学とは何か」「心理学に関心をもつきっかけ」「心理学者としてのあなたに影響を与えた人物，出来事など」「子どもの頃，心について関心をもったと思える最初のエピソード」「心理学の今後の方向性」などを基本とした。面接は，専門を異にする複数の面接者により行われた。録音データについては，そのすべてを書き起こして検討を加えた。全体として，心理学者たちの多様な考え方，背景に触れることができ，心理学，心に関する多くの貴重な語りを収録することができたと思われる。

研究成果の概要（英文）：We conducted interviews with psychologists in various areas of expertise and examined the traits of psychology and the mind by analyzing their responses. The main questions we asked were "What is mind?", "What is psychology?", "How did you get interested in psychology?", "What were the people or events and so on that influenced you as a psychologist?", "Were there any early experiences as a child that possibly caused you to get interested in the mind?", and "What do you feel are the future directions for psychology?". Interviewees were 14 psychologists with various areas of expertise. Interviews varied in length from approximately 90 to 120 minutes and were carried out by two or three interviewers from a variety of backgrounds. All interviews were recorded and then transcribed and analyzed. We gathered a variety of invaluable data related to the thoughts and backgrounds of psychologists that we can apply to a more thorough understanding of psychology and the mind.

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：心理学・教育心理学

キーワード：心理学　心　心理学者　面接　語り　テキストマイニング　描画　質的分析

１．研究開始当初の背景

「心理学とは何か？」「心とは何か？」。これらの問いに対して，何らかの直接的な回答を与えることは困難である。回答を，哲学に求める場合も，心理学研究に求める場合も，先達の心理学者の言葉に求める場合もあろう。しかし，本研究で注目したのは，現在活躍する心について取り組む心理学者が，心理学，心をどのように捉えているのか，という点である。「心理学とは何か？」「心とは何か？」について，真正面から取り組むことは困難であることに加え，真正面から取り組むことで，かえって本質を逃しかねないと思われる。そこで，心理学者が奮闘するところの心理学，心に，本研究組織が向き合うことを通して，間接的に心理学，心の本質を掴もうという意図である。より具体的には，面接という場において紡ぎ出される心理学者の語りに，面接者，被面接者（以下，「対象者」）双方が向き合うことを通して，間接的に心理学，心の本質の一端を掴もうということである。対象者には，自らの心理学者としての来歴を振り返りながら，心理学，心について語っていただくのである。対象者が心理学，心について思考を深め，面接者がそれに寄り添う，対話を深める，そして語りなどを精査し，多様な領域の心理学者たちの考える心理学，心の多様性，共通性，差異性，について感じ取り，それを研究という形に持って行くのである。各心理学者はどのようにして今に至ったのか，という発達のプロセスを読み解くことができれば，心理学が有する根源的な問題にも触れることになろう。

心理学では，質的研究／量的研究，基礎研究／応用研究，基礎／臨床，という形で，必要以上の解離，対立が生じることがある。こうした対立は，特に解消される方向に向かっているわけではないと思われるが，そうした「分断」の背景には，各心理学者が心理学，心をどのように捉えているのか（すなわち「思想」である）という，まさに本研究が検討しようとしていることが大いに関係するだろう。本研究は，心理学界における対立，解消を目指す，ということでは必ずしもないが，何らかの方向性を与える研究にはなると考えた。本研究は，心理学界に「思想」を与えるものと期待し，そして何より，「心理学とは何か」「心とは何か」という究極の問いへの道筋を与えるものと位置づけた。

以上，本研究の特色は，現在活躍中の心理学者の語りを通して，心理学，心の本質に迫ろうとする点にある。心理学者の語りを通し，その背後に透けて見える心理学，心を，研究という形で炙り出すのである。

２．研究の目的

(1)研究目的

多領域の心理学者への面接を行い，「心理学とは何か？」「心とは何か？」といった質問に対する心理学者の語りをもとに，「心理学者が考える心理学，心」について探索することを目的とした。面接では，投影的手法をも活用し，多様な語りを支える各心理学者の生き様に触れ，その心理学者がなぜそのアプローチをとるに至ったかという発達的視点などに注目することにより，心理学，心の本質の一端に迫りたい。

(2)先行研究

上述の視点はまったくオリジナルなものかと言えば，実はそうではない。本研究に類似した試みとして Cohen（2004）が挙げられる（Cohen,D.（2004）. Psychologists on Psychology. London:Hodder Education. 邦訳は「心理学者、心理学を語る一時代を築いた 13 人の偉才との対話」，子安増生(翻訳)，三宅真季子（翻訳），新曜社，2008）。Cohen は，Chomsky，Eysenck，Laing，Zimbardo といった名立たる人物に，その来歴などについて面接で尋ねている。

本研究は，Cohen と下記の点で異なる。第一に，対象者を心理学者に限定する一方，研究業績などの周知度については特に限定しない。第二に，投影的手法，具体的には描画を用いる。第三に，一対一の面接ではなく，専門を異にする複数名が面接者を担い，面接の場に複眼的観点を持ち込み，思考の深化の一助とする。第四に，面接データについてテキストマイニングを行う。第五に，Cohen では，質問は対象者ごとに様々であるが，本研究ではほぼ統一された基本質問を用いる。また Cohen では対話の要素がやや強いが，本研究では聴くことに重きを置く。

３．研究の方法

(1)準備段階

まず，研究組織内部において，試験的に面接を相互に実施することを通して，面接実施上の問題点などを検討した。その上で，インタビュー・ガイド，面接の流れなどの精緻化を図った。

(2)面接

面接は，一対象者あたり１時間半～2 時間で行われた。インフォームド・コンセントを取った後，主面接者の主導のもと面接を進めていった。質問は「心とは何か」「心理学とは何か」「心理学に関心をもつきっかけ」「心理学者としてのあなたに影響を与えた人物，出来事など」「子どもの頃，心について関心をもったと思える最初のエピソード」「心理学の今後の方向性」などを基本とし，適宜質問を補った。すなわち，半構造化面接である。面接の後半部分においては，心のイメージについて，クーピーペンシルを用いての描画を求めた。人型の図のみ記載された A4 版用紙に，対象者自身による心のイメージを自由に表現する形式とした。

面接者は，専門の異なる 2 名あるいは 3 名であった。3 名の場合，主面接者は面接を主

導し，副面接者は適宜質問を，他１名は主に筆記を担った。

(3)対象者

対象者は表 1 の 14 名であった（順不同）。性別，年齢などについては匿名性の観点から削除してあるが，性別の構成は，全体では男性 9 名，女性 5 名であった。なお，以下に記載された専攻については，対象者本人による自己申告である。

表１　対象者一覧

対象者	専攻
A	発達心理学
B	生理心理学
C	感情心理学
D	感覚知覚心理学
E	教育心理学
F	臨床心理学
G	臨床心理学
H	応用心理学
I	社会心理学
J	比較心理学
K	感覚知覚心理学
L	臨床心理学
M	臨床心理学
N	臨床心理学

４．研究成果

録音データについては，そのすべてを書き起こした上で，質的検討，テキストマイニングによる検討，などを行った。描画データについては，語りの解釈に際しての補助的位置づけとなっている。

(1)5 名の対象者に対する質的考察

以下ではまず，5 名の対象者（A,B,C,D,E）の語りについて質的な考察を試みる。

A（発達心理学）は，「行為としての心」として心，心理学を捉える。行動主義的な教育を受け，動物を対象とする研究をしていたが，その後縁あって発達心理学に携わり，二領域にコミットした。その選択には，他者との関わりが寄与した。

B（生理心理学）は，心を「生物を環境に適応させるために発展してきた行動決定システム」，心理学を「そのシステムを解明する学問」よりも広く捉え，動物に関して多くを語った。漠然と人間に関する学問が面白そうだと思い，心理学科を選択した（なお，以上の A，B については，後にさらに詳しく述べることになる）。

C（感情心理学）は，「生物学部心理班」という感覚で心理学を考え，適応の果てに現在心の機能がこうなっていると捉える。死体解剖はできないので医学，動物学，獣医学には進まず，文系の中で理系的な心理学に進んだ。

D（感覚知覚心理学）は，環境からの情報に人間が反応するものが心で，その心がどう反応するかを研究するものが心理学と述べる一方，そのような自身の説明を「寂しい」と漏らし，こうした違和感が終始表現された。

E（教育心理学）は，心理学，心とは何かについて「あまり考えたことはない」と述べ，この問いへの回答は相手によって変えていると言う。E の語り方の特徴は相手の常識を覆すことにあり，否定形式を通して「E の心理学，心」が立ち上がると言える。

以上より，心の捉え方としては，環境を含めるなど広い場合が多く，心理学も同様に広いと言える。一方で，問い自体への判断停止の態度（E）もある。また，語りでは，違和感，否定といった「否定性」も認められた。心理学を専攻するも，どこかしっくりとこない感覚こそが，心理学者を心理学者たらしめ，そうした側面は，心理学，心の本質の一端なのかもしれない。一人の人間として心を自ら感じ，その一方で心について研究を進める中で，ずれや迷いを感じるのであろう。「役に立ちたい」という気持ちも表明されたが（B,D），それはとりもなおさず「役に立てていない」という感覚の存在を示す。

心理学者はどのようにして心理学者に至るのか。幼少期等人生で体験する「心理学の種（seed）」とでも言うべき経験を基盤に，やがて「自分は教育には向かない」(D)，「解剖はできない（C)」，「〇学部に行きたくなかった」(E）といった「後ろ向き」な理由から心理学へ向かう場合もあれば，「高校で興味を持ち」(A)，「何も考えずに」(B）といった場合もある。いずれにしても，心理学者には「それを目指してなるもの」という側面が薄い可能性がある。なお，以上の質的考察は，心理学者の平均像の抽出ではなく，心理学，心の特徴を描出する試みであることを申し添えておく。

(2)2 名の対象者に対するテキストマイニングの結果と質的考察

次に，上記の中で 2 名（A,B）の語りについて，より詳細を述べつつ，またテキストマイニングの結果にも触れながら，さらに考察を深めることとする。テキストマイニングについては，書き起こされたデータを CSV ファイル化した上で，実行した。分析に用いたソフトウェアは，Text Mining Studio（NTT データ数理システム）であった。

A の心への志向性の原点の一つは，幼少期に三面鏡で遊ぶことを好み，三面鏡に何人もの自分が際限なく映るその様に不思議な感覚を抱いたことに見て取れる。また，学校の聖書の授業にて，臨床的な話を興味深く聞いたことも関係するだろう。当初は臨床心理学への興味があったものの，履修上の理由から，履修が叶わなかった。行動主義的な教育を受け，動物を対象とする研究をしていたが，その後縁あって発達心理学に携わり，やがて発達心理学に転向する。様々な局面で，自分自身での選択というよりは，他律的に事が進んでいったことが述べられた。心については

「行動としての心」という形で捉える。絵では，人型の外側に模式的な人を何人か描き，それらと人型との間に重複部分もあった。テキストマイニングの結果，単語頻度解析では「自分」「心理学」「人」が上位にあり（表 2），係り受け頻度解析では「人－思う」が頻度 8 で最大で，「自分－感じる」「皮膚－越える」の頻度 6 がそれに続いた。「皮膚－越える」は A に特有であり，心を人体という物理的境界に封じ込めず，社会・文化との結びつきを強調する。この点は，三面鏡に映し出される無限の自分というイメージと通底しよう。

B の心への志向性の原点の一つは，思春期に，生きる意味について思考を巡らしたこと，また中国古代文化（仙人，呼吸法，道教）への傾倒がある。こうした興味が，やがて自己制御（バイオフォードバック）への関心へとつながっていく様が見て取れた。一方で，幼少期からの，動物好き，生物学への興味，を背景に，成り行き上心理学に，そしてまたある先生との出会いによって生理心理学に行き着く。心を「生物を環境に適応させるために発展してきた行動決定システム」と捉え，動物に関して多くを語り，ときに植物，ロボットについても言及しながら心について語った。絵では，蟻，蛙など他の生物を描き，人間に至る進化の過程と各生物の行動の選択肢数を示した。テキストマイニングの結果，単語頻度解析では「心」「人」「心理学」が上位を占め（表 2），係り受け頻度解析では「心－感じる」が頻度 8 で最大であった。これは，動物に心はあるか，という点で，どの生物から心が感じられるか，について述べていたことが関係する。続いて「ロボット－つくる」の頻度が 5 と続いた。「ロボット－つくる」は B に特有であるが，人間を語る際，ロボット，他の生物という，人間以外から，つまり周辺から迫っていく特性が見て取れる。

表 2　単語頻度解析の結果（上位 3 つのみ）

対象者 A	頻度
自分	28
心理学	24
人	24

対象者 B	頻度
心	59
人	35
心理学	30

以上 2 名に共通する特徴は，第一に，心理学者をして心理学，心へと動機づける，言わば心理学の種を発達のある段階で授かる点である。その種が，何らかの外的要因に導かれ，心理学を専攻させていると思われる。第二に，専門としての心理学の選択が，心理学を目指して自律的に進んできたというよりは，多分に他律的である点も共通する。他律的とは言え，その前提には，それ以前の人生で授かった種がある。つまり，それまでの人生を通して醸成された，広い意味での心への興味・関心という潜在的エネルギーがあり，外的要因に導かれ心理学にたどり着く，という構図が見て取れる。換言すれば，単なる受け身ではなく「積極的な受け身」であり，十分なエネルギーが蓄積された状態にて外的要因に委ねるという姿勢であろう。第三に，動物への言及も共通する。第四に，描画では，人型の外側に絵を描く，つまり心を人の内に閉じ込めない点も共通する。この点は，上述の他律性，動物への深い思考，に関連するだろう。

相違点としては，テキストマイニングの結果，A は「自分」への言及が最頻値であるのに対し，B は「自分」への言及は頻度 14 にとどまり，一方で「心」への言及が群を抜いていた点が異なる。逐語録上では，「自分」を中心に据えた A の語り，「心」を中心に据えた B の語り，という対照は見えつつも，実際の語りを聴いた印象では，そこまで顕著な差異は感じられなかった。なお，A の「自分」を中心に据えた語りは，三面鏡のエピソードにその原点を，B の「心」を中心に据えた語りは，自己制御の対象としての心，多様な生物への興味にその原点を見出すことができよう。

(3)まとめ

以上の分析より，語りに対する質的考察のみならず，テキストマイニングの結果，描画の様子なども加味して多角的に検討することにも意義を見出すことができよう。一方で，テキストマイニングの手法は，有益な面はあるものの，心理学，心の本質的な側面の描出についてはどうしても不得手な印象を抱く。実際の面接場面で語られた豊かな内容を考えると，あくまで，語りの質的分析こそが中心に置かれるべきであろう。

本研究の問題点，それを踏まえた今後の課題としては，第一に，対象者数が少ないという点が挙げられる。しかしながら，限られた対象者数であっても多様性を感じるに至った。第二に，対象者の専門分野として臨床心理学が相対的に多かったが，昨今の心理学領域の拡大化を鑑みれば，より幅広い専門領域の心理学者の語りを検討していく必要があるだろう。

冒頭に述べたような，「心理学とは何か？」「心とは何か？」というあまりにも根本的な問いに対しては，真正面からの検討が難しい。従って，この点については判断を留保し，多くの心理学者の日々の研究活動，実践活動の総体をもって心理学，心と捉えるという立場もあろう。心理学のテキストなどの冒頭部分に，心理学，心について何らかの定義を記述することはあるにしても，実際の研究を通して，あえて「そもそもどうなのか」という点について検討する必要性は薄いのかも知れない。しかしながら，本研究において，根本的な問いをあえて心理学者に投げかけることを通して，心理学，心に対する貴重な視点を垣間見ることのできる可能性を認識できたと言える。本研究のような試みは，今後も継続的に行われることに意義があると考えている。

５．主な発表論文等

〔学会発表〕（計１件）
①村井潤一郎　心理学者が語る心理学・心
日本発達心理学会第 25 回大会,2014 年 3 月
21 日，京都大学。

６．研究組織
(1)研究代表者
村井　潤一郎（MURAI Jun’ichiro）
文京学院大学・人間学部・教授
研究者番号：５０３３７６２２

(2)研究分担者
田熊　友紀子（TAGUMA Yukiko）
代官山心理・分析オフィス
研究者番号：６０２９８２９７
（平成 23 年度より研究協力者）

小林　剛史（KOBAYASHI Takefumi）
文京学院大学・人間学部・教授
研究者番号：３０３３４０２２